

各科の現況と展望

循環器内科 この一年

診療部長兼循環器内科医長 酒井 博司

診療体制

小松義和医師（医長）、吉田史彰医師が転勤し、平成18年4月1日に武田智子医師が着任。酒井（診療部長兼循環器内科医長）と2名体制となる。また、平成18年4月より呼吸器科が分かれ、循環器呼吸器内科から循環器内科となる。

診療状況（検査件数、手術など）

外来は1診体制で1日平均39名であった。入院患者数は1日平均23名で在院日数は21日、病床利用率は119%であった。

平成18年1月1日から12月31日までの心臓カテーテル検査は375件で、当院に循環器科が開設されて以来最も多く、また、内容も電気生理学的検査が52件（前年度は2件）含まれ、不整脈領域への積極的な取り組みが行なわれた。P C Iは74件（A C Sに対する緊急インターベンションは21例、待機的インターベンションは53例）、P T Aは2件であった。永久ペースメーカー移植術は32例（新規19例、交換13例）であった。今年度、循環器領域の検査の中で、以前より大きく件数を伸ばしているのは、心エコーやホルター心電図といった生理検査で、前年度比は1.5倍程となっている。これはひとえに生理検査技師の奮闘によるものであり、この場を借りて感謝したい。

今後の展望

平成19年度はI C D（植え込み型徐細動器）の施設認定をとり、致死性不整脈への積極的な治療に取り組むとともに、C R T（心臓再同期療法）の施設認定も取得予定で、重症心不全症例に対しても、最新の治療を提供できるよう準備を進めている。また、今年度は学会活動、論文業績が非常に乏しかったため、来年度はもう少しこれらの活動にも力を入れたいと考えている。

おわりに

今年度、循環器教育関連施設の更新を行うとともに、平成18年7月からは以前より課題とされていた日本内科学会教育関連病院にも認定された。この認定は、剖検やC P Cなどの実績作りで貢献した当院消化器内科の力がなければ実現できなかったと思う。

循環器内科は、ほとんど全てのCo-medicalと関わり、チームで診療を行うことが多い。また、他科との関わりも多い診療科である。今年度は、医師2名体制というマンパワー不足のなかで、スタッフの方々や、他科の先生には色々ご迷惑をかけた場面が多々ありました。その中で皆さんには協力的に支えて頂き、大変有り難く感じています。来年度は、今よりも診療体制を充実させられるよう努力したいと考えていますので、今後とも宜しくお願い致します。